

Phillis M. Ford,

“Principles and Practices of Outdoor/Environmental Education”

——野外・環境教育の原理と実践——

黒木保博

「いかにして自然と人類とが共存をしていくか」これは科学万能時代の現代に住む我々に課せられた一つの重要な課題である。この共存がなくては人類の未来の繁栄も考えられず、当然のことながら急激な自然破壊を肯定する態度やこの破壊に無関心な態度をとることは許されない状況にある。

人間が自然に関心を示す態度、あるいは自然破壊ではなく自然環境を満足 of いくように楽しむことが出来る心の準備が我々とくく人類の未来を背負う青少年には不可欠となっている。ここに野外教育の意義がある。すなわち、多くの青少年が自然を楽しむと共に、自然と人間との相互関係に興味を示し、自からの体験を通じて自然理解あるいは自然保護を学ぶことが野外教育の重要なねらいの一つとなっている。青少年に自然について深い関心を示すような動機づけをすること、青少年に自からが自然を満足でき

る心の準備をさせることが今日の野外教育のねらいである。

P・M・フォードによって著された「Principles and Practices of Outdoor/Environmental Education」は現代のアメリカ合衆国における野外教育を理解するためには一読しなければならぬ本である。著者はオレゴン大学のレクリエーション・公園管理学部の教授であり、これまでにも“Camp Administration”、“In-formal Recreation Activities”、“A Leaders Guide”などの本また野外教育に関する多数の論文を著している。一九七三年にはアメリカ・キャンプ協会より長年の野外教育の実践と研究に対してH・S・ディモック賞を授与されている。

本書は次の章によって構成されている。

- 1 Introduction to Outdoor/Environment Education (野外・環境教育とは何か)

Phillis M. Ford, “Principles and Practices of Outdoor/Environmental Education”

Phyllis M. Ford, "Principles and Practices of Outdoor / Environmental Education"

- 2 A History of Outdoor / Environment Education (野外・環境教育の歴史)
- 3 Objectives and Issues (目的と問題点)
- 4 A Teaching Progression (野外教育の進歩段階論)
- 5 Basic Principles of Outdoor Pursuits (野外教育追求のための原則)
- 6 Sites for Outdoor Education (野外教育のための地理的條件)
- 7 Field Trips (野外実習のやり方)
- 8 Resident Outdoor Schools-Administration (宿泊型自然学校の運営と管理)
- 9 Resident Outdoor Schools-Program Consideration (宿泊型自然学校のプログラムと考慮点)
- 10 Examples of Outdoor Education Programs (野外教育プログラムの具体例)

フォードはまず野外教育とは何か、という定義の議論から出発している。野外教育と呼ばれる具体例は限りなく出せること、そのことは野外教育という言葉があまりにも容易に使われていることに通じている、とまず指摘している。野外教育の定義に関してはまだ議論の余地が残されているが、著者はG・W・ドナルドソン (George W. Donaldson) の定義である「野外教育とは自然の中で、自然について、自然のための教育」が野外教育の概念を示

す的確な表現であるとしている。「自然の中で」(in) は教育する過程における場所であり、「自然のことについて教える最高のものはその場所にて教えるべきである」という野外教育の父と呼ばれるL・B・シャープ (Lloyd B. Sharp) の主張に基づいている。四季を通じての自然の移り変わり、いろんな天候の状況(条件)の中であるいは異なる地理や環境の中でこそ野外教育が行なわれるのである。「自然について」(about) は「何を」学ぶかという目的と内容についてである。学校教育との関連では、初期の野外教育者は野外について教えることが学校の教科のためにはより魅力を増すことになると信じていたが、今日の多くの教育者は野外においては教室でのすべての教科を教えることが可能であり、その教科の魅力を増すことになると考えている。教える媒介として野外教育を利用することが好まれているという。「自然のための」(for) は「何故に」(why) という理由の答になることである。野外を利用する理由には、たとえばレジャーのためがあり、また、野外を理解しなければならぬ理由としての答では、たとえば自然の美しさや資源保護からの教育がある。以上のごとくフォードは、野外教育は教育の過程、場所、目的、内容、そして理由から定義を検討しなければならないと主張している。また野外教育は極めて学際的内容を含み、かつ公式の教育システム(学校)と非公式教育システム(組織キャンプやレクリエーションなど)を含んでいることが特徴である。これらのことから著者は本書を通じて野外教育の目的、過程、理由、そして教育方法に

ついで詳しく論じている。

フォードは書名に Outdoor/Environmental Education (野外・環境教育) という表現を用いた理由を次の様に説明している。一九五〇年代より「学校キャンプ」が「野外教育」という表現に変わったように、アメリカでは一九六〇年代より「自然保護教育」(Conservation Education) が多く用いられ、一九七〇年代より

はさらに包括的概念としての「環境教育」がこの分野のみならず他の分野でも用いられるようになっていく。「環境教育」とは、人間をとりまくすべての環境(自然と人工を含める)の質と量について教え、かつ自然と人間との密接な関わり方を考えていこうとするものである。従来のように自然を単に知識として教えるのではなく、(たとえば草花の名前、木の名前を覚えさせるなど)、生態学的アプローチからの全体的見地に立つ個々の相互関連性まで考えさせる教育なのである。現在「自然保護教育」は自然資源のかしこい利用方法を教える教育として考えられ、「野外教育」も「環境教育」の一部として考えられ、つまり自然と人間との相互関連性を具体的に教えるための一方法として考えられている。すなわち、フォードは概念の変遷とこの立場を明らかにしながらもすべての環境教育について本書では述べられないこと、環境教育の視点から野外のみを論ずることもまだ出来ないとの理由から「野外・環境教育」と表現したと説明している。

わが国においては現在自然保護教育が盛んに叫ばれているが、アメリカのような環境教育の概念で野外教育をこらえているのは

一部にしかすぎない。フォードが第一章で明らかにしている「野外教育」「環境教育」「自然保護教育」「野外レクリエーション」のそれぞれの概念上の相違点とともに、自然資源を利用し、理解し、満足できるための生涯に渡る知識・技術、態度を学ぶことが野外教育の目的であるというフォードの主張は今後のわが国の野外教育のあり方に参考となるであろう。

第二章では野外教育の歴史が紹介されている。今日までわが国の野外教育に関するいくつかの文献で紹介されてきたアメリカの野外教育の歴史はH・デイモックによる組織キャンプの発達史であった。フォードは詳細に渡って野外教育の歴史を連続性を持ちながらも時代的要請で変化した概念・取組みで明らかにしている。現在でも野外教育の代表とされる組織キャンプには年間八百万人が参加していると言われるアメリカの実状は、この発展段階を知ることによってその理由をより理解することができるであろう。また、この章ではこれまでわが国ではアメリカの学校キャンプはF・ガン(Frederick W. Gunn)夫妻によって開始されたと紹介されてきたが、フォードはガン夫妻より以前にJ・ロダウエル(Joseph Cogswell)とG・バンクロフト(George Bancroft)が学校キャンプを開始していったことを明らかにしている。この事実はW・M・ハンター(William M. Hammerman)の“Fifty Years of Resident Outdoor Education: 1930-1980 Its Impact on American Education” American Camping Association, 1980, にも紹介されている。

第三章では野外教育で期待できる結果(野外教育の目的)を個人の生涯教育の視点から述べている。

第四章では野外教育の進歩段階論について述べているが、いわば本書の中核ともいべき章である。フォードはアメリカにて現在実施されている野外・環境教育プログラムを分析し、概念、教育方法、教材などで整理している。この野外・環境教育プログラムの詳細については本書の第十章にて紹介されているが、フォードは初心者向けの教育段階から高度なレベルでの複雑な自然と人間との相互関係を教え、学ぶ環境教育に至るシステムティックな段階を研究している。

野外に親しみがなく、自然に不安や恐怖を持つ人々や青少年に對してどのように親しみをもちよう「動機づけ」をしていくか、第一段階として木や葉の形、色、肌ざわりなどによる「芸術形態的理解」を深めていくこと、第二段階には身近かな日常生活の用具、形などの「類似性」を考えさせること、第三段階では人間の「五感(視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚)による自然理解」を働きかけていく段階的方法がある。以上が自然にまず親しみをもちたせる基礎的段階である。自然に慣れ親しんだ段階から第四段階として「生態学的原則」を学ぶことになる。自然の社会はそれぞれが生態系システムをもち、その勢力範囲が他と関係し合い、調和することによってお互いに存在していくことが出来ていることを学んでいく段階である。さらに第五段階として「問題解決過程」となる。この段階では動・植物の生息地を観察・調査し、あ

らかじめ作成されている質問に回答しながら問題を学習することになる。第六段階として「決定過程」がある。現実の環境問題をモデルにしながらか解決のための複雑な原因を整理し、仮説をたてて最良の解決方法を選択・決定していく学習段階である。第七段階は「人間居住工学(Ergonomics)」段階である。野外教育によって最終的には人間が生活している現実の社会全体を見渡し、都市問題も考えていこうとする段階である。自然資源・人工資源、そして文化を含めた統合的接近が必要とされる。第四段階から第七段階までは環境問題を基本的事実の理解から始めて、統合的視野から人間の日常生活の問題解決にまで関係させていく段階である。

この章は第十章の野外・環境教育プログラムの具体例を理解した上で読むとフォードの教育段階論がより理解できると思われる。第五章、第六章、七章、八章、九章は野外・環境教育を実施する際の参考となる内容が整理されている。第十章はアメリカにて実施されている代表的な野外・環境教育の具体的プログラムが詳細に紹介されている。たとえば一、環境順応プログラム(Acclimatization) 二、グリーン・ボックス(Green Box) 三、OBIS(Outdoor Biology Instructional Strategies) 四、サンシャプ・アース(Sunship Earth) などである。

さて、本書の内容を大まかに紹介してみたが本書が我々に与えてくれる意義としては次のような点がある。

今日の環境問題は環境そのものの危機だけではなく、人類の存在そのものの危機でもある。この危機を救うための一方法として、

一般の人々、そして特に青少年に対する野外・環境教育の重要性があることは誰もが賛同する所であろう。青少年時代に自然に親しみをもたせ、人間と自然との相互関係を理解させる必要がある。青少年は自からの体験を通じてこの相互関係の重要性を発見し、分析し、探究していくことになるからである。

この際に大切なのはフォードがこの本を通じて書いているように単に野外・環境教育の重要性を叫ぶのではなく、いかにそれを教え、かつ学んでいけるか、青少年や一般の人々が自から発見し、解決のための行動を起していくかという極めてシステマティックな具体的学習方法を示すことであろう。この点、わが国の場合には新しい概念に示されるものの、その概念を人々に教え、あるいは学ぶための方法論が具体的に示されない場合が多いと思われる。「植物を大切にしましょう」などの段階で止ってしまうのである。フォードが本書の中核として書いている第四章はこの点からわが国の野外教育者やリーダーに学ぶべき方向を示唆している。

第二には、グループワークを研究している私にとって「プログラム」の立案と指導・運営という点から本書は極めて有意義である。グループのプログラムを検討するための参考にすべき点が多く書かれてある。

第三には、野外教育を学校教育に取り入れていく必要性を本書を通じて教えられた。そのためにはまず学際的な研究の取組みが要求される。わが国でも近年野外活動センターを利用した宿泊型

の行事が学校教育に組み込まれてきているが、まだプログラムは集団生活の体験をさせることに強調点が置かれ、せっかく自然の中で宿泊生活をしながらも何もそれについては学習することなく終っている場合が多い。本書を読めば青少年に与える最良のプログラムに気づいていないことを痛感するにちがいない。

(by John Wiley & Sons, Inc.)